
緑風のシェータ

日野咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑風のシエータ

【Nコード】

N0521Y

【作者名】

日野咲夜

【あらすじ】

少女神は、ある時、少し変わり者の皇子・アトルと出会う。アトルは少女に？シエータ？という名前を与え、二人は心を通わせていく。そんな時、帝国に彗星が現れた。それは闇を追い払う神ウィツイロポチトリが弱っているからだと騒がれ、高貴な生贄が捧げられることになった。そして、その生贄として第2皇子であるアトルが選ばれてしまった！

古代のアステカ帝国を舞台に、一人の神と少年の物語が、始まる。

（毎週日曜更新）

登場人物（随時更新）

（登場人物）

シエータ（シヨチトナティウ）

元は名無しの下級神。『シヨチトナティウ』というのはアトルに貰った名前。植物の中の、主に草花を司る。名前の由来は『太陽の花』。

蜂蜜色の肌と白緑色の髪。瞳は、菜種油色。明るい性格の少女神。

アトル（アトル・イルウイカミナ）

アステカ皇帝モクテスマ2世の第2皇子。しかし、モクテスマ2世の側室の息子なので、周りにあまり良く思われていない。

飴色の肌と濡羽色の髪。瞳も髪の色と同じく。誠実で心優しい少年割と博学。

メツスィー

アトルの友人。自称・女流詩人だが、実は男盗賊。でも女装が得意。黒髪黒目の褐色の肌で、一般的なアステカ人。

面白いもの好きで明朗な性格だが、実際は……………？

モクテスマ2世（モテウクソマ・シヨコヨトル）

アトルの父親で、アステカの第9代皇帝。

長身の引き締まった体で良い形の顎髭を持った、穏やかな目の人物。

ミクトラン

一応アトルの側近。お役目大事な人柄で、滅多に感情を表に出さない。

アトルを冷遇する者たちの一人でもある。

（登場する上級神の方々）

テスカトリポカ（ヤヤウキ・テスカトリポカ）

『煙を吐く鏡』という名を持つ、黒い夜風の神。生死、運命、正義をも司り、泥棒や呪術師の守護神。また、月や夜空、破壊を齎すもたら邪悪な闇の怪物に力を貸す存在。ケツアルコアトルやウィツィロポチトリとはライバル。

ケツアルコアトル

『羽の生えた蛇』。風と生命と豊穡を司り、太陽神、大気・天空の神ともいわれている。一度テスカトリポカによってアステカから追放されたが、『一の葦の年』に帰還する」と言い残している。人ひと身御供を嫌った神。

ウィツィロポチトリ（オミテクトリ）

『南の蜂鳥』。太陽、戦争、狩猟の神で、太陽に害する闇の神々を追ひ払う戦士、または軍神。

トラロツク

アステカ以前のトルテカ時代から信仰された雨の神。雲、雨、稲妻、山の湧水を司り、房のような髭と和で囲まれた大きな目を持つ。ウィツィロポチトリと共にアステカの大神殿に祀られる。

プロローグ

最初に、？オメテクトリ？と？オメシワトル？と言う、一対の創造神が居た。

彼らは、宇宙、神々、そして地球を創造し、四人の息子を生んだ。
長男の赤い神、トラトラウキ・テスカトリポカ。

次男の黒い神、ヤヤウキ・テスカトリポカ。

三男の白い神、ケツアルコアトル。

四男の青い神、オミテクトリ。

彼らが生まれて六百年後――。

三男のケツアルコアトルと、四男のオミテクトリにより、天地創造が行われた。

彼らは協力して、火や、天や、地、海、地下界などを創り、そして一組の男女を創った。

男は？ウシユムコ？、女は？シパクトナル？と名付けられ、二人の間から人間が生まれた――。
マゼワル

――時は経ち、神々の住まう大地に、人間達が？テノチティトラン？という都市を築いた。

彼らは大地を耕し、町を増やし、遂に？アステカ帝国“という国を建国した。

その国の民達は、古くから神々の存在を感じ、それを信じ、代々

祀り上げてきた。

その中に、四人の兄弟神が居た。その内の二人に、ケツアルコアトルと、人々に？テスカトリポカ？と呼ばれるヤヤウキが在った。

二人は正反対だった。生贄を求めるテスカトリポカと、平和を好むケツアルコアトル。それ故に、しばしば兄弟喧嘩の領域を超えた問題を起こしていた。

そして、ある時遂にケツアルコアトルが、テスカトリポカによってアステカの地から追い出された。

勝敗は、決まったように思えただろう。

だが、彼は言ったのだ。

『私はアステカから永久に消える訳ではない。？一の葦の年？に必ず帰還しよう』――。

（『アステカ神話』より）

第1章 草花の神様

温かな日の光が降り注ぐ丘に、少女はごろんと寝そべっていた。

「はーあ………退屈」

血色の良い蜂蜜色の肌は、太陽の光を受けて、仄かに赤らんでいた。春ほど心地の良い時期はない。けれど、春ほど眠くなる季節もない。

光をきらきらと反射する白緑色の長い髪を揺らして、少女は一つ寝返りをうつ。その際に頭に載っていた小さな桃色の花が、ポロリと落ちた。その様子はとても愛らしくて、まるで花の妖精か、女神のようだった。

——そう、彼女は神だ。けれども、あまり位の高くない下級神で、司っているのも植物の中の小さな草花だけ。今回も、上司の神に言われて、大地の草花の様子を観察しに来たのだった。

今はその仕事もすっかり終わってしまったて、退屈な時間を持て余しているところだ。

「でも……気持ちいいなあ。あー、あつたかい……」

「そうだね」

(！)

突然掛けられてきた声に、少女はハツとして起き上がる。すると、葉が踏み拉かれた草原の上にばらばら落ちた。余程草塗れになっただのだろう。

「誰よ………あなた」

訝しげな目で、少女は声の主を見つめた。

> i 3 5 5 0 7 — 4 0 6 3 <

このアステラでは一般的な、黒い髪黒い目、そして鉛色の肌を持つ少年だった。だけど、どことなく品があつて、普通の育ちではないことが見て取れた。そもそも、着ている服が高貴な身分の者であると語っている。

「僕はアトル。アステカの農民。君は？」

につこりと微笑んで手を差し伸べる彼に、少女はふいとそつぱを向いた。

「あなたが嘘をついてるから教えない！」

アトルは驚く様子もなく、相手を窺うように耳元でそつと囁いた。

「……嘘つて？」

「あなたが身分を偽ってること！」

近づいてきた彼を押し退けて、彼女は彼を睨みつける。ただの農民が、どうしてそんなに綺麗な服を着ていられるというのだろう。

「じゃあ、君は僕がどんな身分だと思う？」

アトルは面白そうに、少女に問いかけてきた。睨まれていることを、あまり気にしていないようだ。

そうねえ、と少女は顎に手をやる。

「……きつと神官か、または皇族！　と思うけど、皇族がこんな所でふらふらしてるのも可笑しいから……たぶん神官の息子辺りでしょう？」

口角をにやりと上げて、自信たつぷりに答える。自分で言うのも何だが、これでも洞察力は高い方だと思っている。

「……惜しい、外れ。僕にはね、国の最高位に立つ父上がいるんだよ」

まどろっこしい言い方をしているが、少女はピンときた。

——あつ。

「第1皇子!？」

目を見開いて驚愕する少女に、アトルはくすくすと楽しそうに笑った。

「またまた外れ……。僕は2番目。アステカの第2皇子なんだよ」

——えええええ——！！

「どっちにしても皇子様じゃない！　こんな所で何してるのよ！」
動転して早口で喋る少女に、アトルはしつ、と言って彼女の唇に人差し指を当てた。

「ごめん、あんまり騒がないでね……ばれると大変だから」

「大変」と言っていないながらもくすりと笑っているから、全然説得力がない。でも、少女もそれがどんなことかは理解しているので、言われる通りに静かにした。

「さて、と……じゃあ、君の名は？」

名前を聞かれて、少女は戸惑った。どうすれば良いのかわからない。だって……自分には名前はないのだから。

上司にも名前で呼ばれることはなく、いつも？草花係？と呼ばれていた。

本当は自分にも名前が欲しかったけれど、それは仕方がないことだと理解していた。数少ない上級神とは違って、自分達下級神は星の数程沢山居る。その一人一人の名前なんて、とても覚えられない。だから名前は与えられず、担当するものの名で呼ばれる。枯葉なら？枯葉係？、草花なら？草花係？と……。

「どうしたの？」

アトルが心配そうに顔を覗き込んできた。その時、いつの間にか自分が俯うつむいていることに気づいた。

——こういう時は、人間が羨うらやましい。ちゃんと名前があつて、その存在を知っていて貰えるんだから。

考えすぎて涙が出てきそうになってきたので、前向きに考えることにした。うん、？草花係？という名前だということにしておけば良い。……少し変だけど。

「く、草花係……」

顔を上げて、精一杯の苦笑を浮かべて言った。恥ずかしさで、元々赤かった頬は真っ赤になっていた。

「ふうん……そうか……。だから君は、草花みたいに温かいんだ

ね」

アトルは、声を立てて笑ったりはせず、優しく微笑んでくれた。皇子様だから、そんなことは基本なのかもしれないけれど、なんだか、ほっとした。

アトルは、少女がやっていたように原っぱにごろんと寝転んだ。その様子は皇子というよりは、彼が言うような農民みたいで、何だか笑えてしまった。そして、彼の隣に少女も腰を下ろす。

「春は気持ちいいなあ……」

彼は、瞼を閉じて呟いた。

それ以上、彼は何も言おうとしなかった――。

しばらく経って、彼はふと目を覚まし、飛び起きた。

「……うん、決まった！」

「？ 何が？」

さつさと立ち上がる彼に驚きながら、少女も起き上がる。やっぱり草がばらばらと落ちた。

「君の名前！」

アトルは楽しそうに言った。髪には葉っぱがまだ付いていて、無邪気な子供のようだった。

「あたしの……名前？」

そうだよ、とアトルは彼らしい爽やかな笑みを見せた。

「君は温かくて、陽の光みたいだから……？ ショチトナティウ？」

「！」

「ショチトナティウ……？ 太陽の花？……」

——アトルは、寝てたんじゃなくて、あたしの名前を考えていてくれたの？

唖然とするショチトナティウに、アトルは笑った。

「そう、ショチトナティウ……？ シエータ？！」

「……シエータ……」

少女はその名前を呟き、俯いた。そして小さな小さな声で、言った。

「……………」

アトルはあえて聞き返さず、じっと彼女を見つめた。

「ありがとう……名前を、くれて」

小さなシェータの頭に、アトルはぽんぽんと手を置いた。

「どういたしまして」

彼の手は、人間でいう母親のようで、とても心地良かった。

（そうだ……）

——アトルは、あたしの疑問に答えてくれた。名前もくれた。だから……これは伝えなくちゃ……。

あることを思い出して、シェータは顔を上げた。涙は出ていないでも、瞳は潤んでいた。

「あのね……あたし、アステカ人じゃないの」

その言葉の意味が彼に伝わるように、はつきりと言い切った。

「うん、分かってるよ」

アトルは驚いたりはずせず、ただ微笑んだ。

——見れば分かる。彼女がアステカ人ではないことは。

自分達より白い肌、色素の薄い髪、金のような菜種油色の目……。異形だからこそ、興味を持った。話しかけたいと思った。……彼女が逃げてしまわなければ、だけど。

シェータは、言い難そうに言葉を続ける。

「それでね……あたしは、その……あなた達の言う、神様なの……

……」

「えっ……」

今度ばかりは、さすがの彼も驚きを隠せないようだった。それもそうだろう。相手に「自分は神だ」と告げられたら……。

「そうか、そうなんだ！ 君は神様なんだね！」

けれど、彼の顔はすぐ興味津々な子供のそれに変わった。

「そうかぁ……神様かぁ。君は凄い人だったんだね。あ、人ではな

いか……」

楽しそうに話すアトルに、シェータは食いついた。

「違うよ！ あたしは凄くなんかない！ ただの、下級神だから

……」

シェータは苦しげに眉間に皺しわ寄せた。名前を貰えなかった悲しみ、苦しみよみがえが蘇よみがえってくる。

でも、アトルはそれを不思議そうに淡々と言うのだ。

「……下級？ 人でも神でも、上下なんてないよ。…それに、僕達にとって君達は本当に尊敬する存在なんだ。君だって……何かを司っているんだろう？」

「一応、草花を……」

「操ったり？」

「それはまだしたことはないけれど……草花畑を一瞬で作ったりとか……」

「やっぱり凄いやないか！」

アトルは再度瞳を煌めかせた。

「僕等人間は弱い生き物だよ。だから、特別な能力を持った者に憧れるんだ」

彼は、どこか遠くを見ていた。何かを探すような、求めるような……。

常に何かを求め続けるような彼は、好奇心の宝箱みたいだと思っ
た。

「凄いのかなあ……」

シェータも、彼のように遠くを見つめた。太陽が暖かい日差しを
投げ掛けていた。

「君は凄いし…それに、僕も凄い」

「！ 自分で自分のこと褒める？」

妙なことを言うアトルを、シェータはぎよっとして見つめた。

——あれかな。人間達の言う、自己満足？

「それってさ、自己満足じゃ……」

「あははっ、たまには自分も褒めないと……ね？」

言い掛けたシェータを遮って、アトルは初めて声を立てて笑った。
それが何だか嬉しくて、シェータも笑った。

「凄いところって…例えばどんな？」

「君は草花の友達で……僕は君の友達！」

「友達？」

シェータがきょとんとすると、アトルは再び手を差し伸べた。

「ほら、まずは握手。今日から、僕は君の友人だよ」

「…うん！」

少女は戸惑うことなく、彼の手を取った。

——この時から、シェータの中で、一つの齒車が廻り始めた——
|。

第2章 アステカの都

暖かな丘の上、二人の人影はじつと目の前の小鳥を見つめていた。

「……いくよ、せーのっ！」

シェータは勢いよく縄を引き、籠を支える木片を倒す。運良くその下に居た小鳥が、籠の中に閉じ込められる。

シェータと傍に隠れていたアトルは、嬉々としてその籠に走り寄った。

「やったあー！ 捕まえたよ、アトル！ なかなか上手いじまでしょ」
初挑戦の罠で捕まえた小鳥を掴んで、シェータはきゃっきゃと飛び跳ねる。その小さな子供のような仕草が、とても愛らしい。アトルも微笑む。

「でも、シェータ。罪のない小鳥は逃がさなきゃいけないよ」

幼い子供にするように頭を撫でられ、そう諭されて、シェータは渋々小鳥を放す。丸々とした小さな薄茶の小鳥は、暖かい春の晴天へ向かって元気に羽ばたいていった。

シェータはそれを清々しい表情で見送ると、今度は膨れっ面になってアトルに抗議した。

「まあ……市場に持って行って誰かに買って貰おうと思ってたのに……」

彼女は、数日前アトルに連れて行ってもらった市場に行く口実が欲しかったのだ。前回言った時はあまり時間がなくて、まだ見切れてない所が沢山あった。それを見に行きたくてうずうずしていたので、少し残念そうな顔をしている。

「生き物は自然に居る方がいいだろう？」

アトルがいつもの人当たりの良い笑顔で笑うと、シェータはそっぽを向いて顔を赤くした。

——そんな風に笑って注意されると、まるで自分が子供みたいじゃない。

だが、ふとある案を思いついて、アトルに向き直る。

「でも……誰かが飼ってくれたら、小鳥は幸せじゃない！ 苦労せずに食べ物を貰えて……」

「本気でそう思うの？」

両手拳を握って力説するシェータに、アトルは悲しそうな顔をした。まるで、その小鳥の？ 悲しみ？ が分かっているとも言つように。

「シェータ、僕の身分は？」

アトルがそう問うと、シェータは飽き飽きして答えた。目を伏せて、ふう、と溜息をつく。

「だから、皇子様でしょ。もう、これで何度目の自己満足？」

「そう、皇子、だよ」

むくれているシェータの皮肉はあえて無視して、アトルは言葉を続けた。

「皇子とか皇帝っていう身分を皆は羨むけど、実際は凄く窮屈なものなんだ。どこに行くにしてもいつも護衛がついて来るしね。それこそ鳥籠の中の小鳥と同じで、自由なんかないんだ」

（…皇子様も、意外と大変なんだなあ）

「鳥籠の中の、鳥かあ……」

（……………ん？）

しみじみと空を飛んでいく数羽の鳥たちを見ていて、疑問が湧いた。

「ちょ、ちよつと待ってアトル。もしかして今も誰かが見張っているんじゃない？」

冷や汗を浮かべて尋ねるシェータを、アトルはあははっ、と笑い飛ばした。……この皇子様も、だんだん農民染みてきたことだ。

「それはないよ、シェータ。大丈夫、ちゃんと撒いてきたから」

「ま、撒いて……？」

そんなことをして良いのだろうか。護衛が主を見失ったりしたら、首が飛ぶんじゃ……。

「それって本当に大丈夫なの？」

心配そうな、どこか困惑した顔でシェータは問う。対するアトルは、心配ごとなんか全くないと言ったように、楽観的に笑っている。「大丈夫だって。そんなの得意だし、護衛達は自分で理由を見つめるだろう？　いつもそうだったしね」

アトルは何でもないことのように言っているが、シェータにはそれが安易なことには思えなかった。

「いつもって……なんで？」

先程から質問攻めで、少ししつこいかなと思ったけれど、引つ込むのは性に合わない。

「そうだなあ、まず僕の生まれに問題があったのかな」

何とも言わず、アトルは思い出話のように語ってくれた。

『僕の父上は今の皇帝であるモテウクソマ・シヨコヨトル陛下だけど、母上は、ちゃんとした奥さんじゃないんだ』

アトルは、遠くに霞む街を見て、懐かしむように言った。

『えーと……それはつまり、愛人ってこと？』

シェータが首を傾げていると、アトルは、まあそんなところかな、とぼやいた。

アトルの言っている意味をもう一度良く考え巡らしてから、再びかくんと首を傾げる。

彼女は天界の出身だ。天界では、一人の夫に子供が沢山居たり、女が沢山の夫を持つのもごく普通のことだった。それが人間ではあまり良くないことらしい……嫉妬深い女達や、誠実だとかいう男達にとって。

『皇帝にお世継ぎがいっぱい居るのは良いことなんじゃないの？』

『皇帝にとつてはね』

アトルは草臥れた様子で、ふう、と溜息をついた。聞かれたくないことだったのだろうか、シェータは戸惑っていたが、彼は自分

から切り出した。

『まず、第1皇子は正妃の子供だね。で、僕は第2皇子。このまま何もないければ兄上が帝位に就くのは分かるよね?』

シエータはこくりと頷く。

『だけど兄上は病弱で、あまり体の調子が良くないんだ。これは政に支障を来す虞おそれがある。となると、何人かの者達は、健康で、その上利発だとか言われている僕に次期皇帝へと即位して貰いたいと考えるようになる訳だ』

(…利発?…)

また自己満足かと、シエータは心の中で苦笑した。

『そうなると周りは黙っちゃいない。正妃様はお優しい方であまり騒がしいのは好まないけど……彼女や兄上の側近達やっきが躍起やっきになつててね……。ちよくちよく嫌がらせをしてきたんだ』

『え……』

ふわふわしていた気持ちが追い出され、重たい気が体の中に据え置かれた。

シエータは咄嗟とつとに顔色を変え、アトルに掴み掛る。

『い、嫌がらせてってどんな!? 毒盛られたりはしなかった!? 蠍さそりを投げ掛けられたりは……』

『シエ、シエータ……』

物凄い剣幕で訊いてくるシエータの肩をやんわりと抑えて、アトルはまた苦笑いした。

『嫌がらせて言うっても……そんな大したことじゃないよ。派手にやると彼らの身が危ないからね』

『そう……?』

『うん、まあ……でも、僕のお目付け役は彼らの手の者だから、正直言つて僕の警護なんてどうでも良いんだよね。だからこうやって好き勝手出来るってこと』

『……そうだったんだ……』

——アトルは笑って言うけれど、本当はもっと辛いことだってあ

つたはずだ。それを……今みたいに誰にも言わずに過^{すご}して来たのだろうか。

『まあ、そのお陰で良い友人が二人も出来たけどね』

『……………二人？』

何か引つかかった。

（一人は……あたしだよ。あれ？ じゃあもう一人は……）

頭を抱えて、むーんと考え込んでしまっているシェータに、アトルは思いがけないことを言った。

『会わせてあげようか？ 僕の最初の友人に』

アステカ帝国の首都、テノチティトラン。

賑やかに溢れかえる人々と、文明豊かな街。

そこにはいくつもの商店が並んでいて、トウモロコシや芋の匂いが香ばしかった。

さらに食べ物だけでなく、綺麗な声、羽の鳥や、美しい衣装なども目に付いた。とにかく彩色豊かな街だ。

市場にはすでに来たことがあったので、大体の勝手は分かる。迷子にはならない。だから、本当は燥^やいであちこち見て回^{まわ}りたかったけど、そう出来ない理由があったので、シェータはアトルに手を引かれるまま、静々と歩いていた。

理由、というのはアステカの人間なら誰もが分かるだろう。そう、彼女の風貌だ。

アステカ人の全体的に黒っぽい風貌の中で、彼女の容姿は目立ち過ぎる。その上異国人などが国内に居たら、すぐさま皇帝の目が付くだろう。そうなったらアトルに迷惑が掛かってしまう。それは避けたかった。

とりあえず人目に付かないように肌には泥を塗って汚し、さらに頭からすっぽりと布を被った。そしてアトルも皇子という身分上シ

エータと同じように布を被って人目を避けた。これなら誰も気付かないだろうということで、都を訪れることになっているのだ。

最初に市場に来た時は、逆に怪しい人と思われて警戒されてしまっているのではないかと思ったが、同じような格好の人は割と多く居て、ほっと一安心したものだった。後は大人しくして居れば良いだけのことだ。

とは言え、やはり興奮してしまうのが彼女の性なのだが。

「わ……アトル見て見て！ あれ美味しそう……あ！ あっちには綺麗な小鳥が……」

目をきらきらさせて、シエータは小動物のようにあちこち見て回った。その後をアトルが慌てて追いかける。

「シエータ、まずは僕の友人との待合場所に行かないと……」

「あ、あれは何？」

シエータは一つの集いを指差して訊いた。そこには貴族の者やまた貧相な者など、様々な人々が集まっていた。

好奇心に逆らえず、シエータはそこへ駆け寄る。

「ちょ、シエータ！」

アトルは彼女を止めようと腕を伸ばすが、彼女は捉まらず、さっさと先に行ってしまった。

人混みの隙間から、シエータはその集いの様子を覗く。

そこには沢山の裸の人々が居て、何だか交渉をしているようだった。

追いついたアトルがシエータに言った。

「シエータ、あれは奴隷売買だよ。人間達と同じ人間の取引を行っているんだ」

「人間の、取引？」

妙なものでも見るような目で、シエータはアトルを見つめた。

——人間が、人間を売る？ 彼らは、そんな愚かなことをしているというの？

シエータには、にわかには信じられなかった。だってどう考えて

も可笑しい。同じ種の仲間を、差別して物のように扱うなんて。

「人間ってというのは、知能がある代わり、醜い生き物だからね。仲間同士で争い、競い合う」

「あなたも人間でしょ？」

冷めた目で奴隷売買の様子を見つめるアトルに、シェータは詰め寄った。眉間に皺を寄せ、いかにも理解できないと言った表情をしている。

アトルは、己の胸をぎゅっと握り締めて、やり切れない表情で言った。

「……僕は、自分が人間であることが悲しい。もつと自由に在りたかったのに……人間の世界に居たら、それもままならない」

「アトル……」

——初めて、彼の心の悲しさを知った気がした。

困惑するシェータに、アトルははつとした。そして何のためにここに来たのかを思い出す。

「あ、ごめんね変なことを言っつて。これは言わば僕の理想。深く考えないでほしい」

——理想。

彼はそれは自分の理想だと言っただけで、本当は現実で在りたかったのだらう。それを思うと、無性に苦しくなった。

それは自分でも良く分からない感情で、自分は彼に同情しているのか、それとも人間が腹立たしいのかも、分からなかった。

「シェータ、ここは離れよう。奴隷市場は性質の悪い破落戸が集まっていることもあるからね」

「分かった」

市では、ちょうど若い女の買い取り手が決まったところだった。

彼女はまだ幼く若い少女のようで、その顔に浮かぶ絶望の色が、見るに堪えなかった。

（……どうして）

どうして神である私達はこんなことを見過ごしているのだらう。

上級の神ならば、止めることも出来るかもしれないのに……どうしてなんだろう。

「お嬢さん」

(！)

低く重い声と共に、不意に背後から肩を掴まれてびくつとした。咄嗟に声の主を確認しようと思ったのだが、体が硬直して動かなかった。

(大きな手……アトルの言っていた、破落戸？)

「……あなたは、何ですか？」

初めての体験に緊張しながらシェータは問う。

蠢く^{うごめく}気配がし、シェータはゆっくりと振り向かされる。顔に冷や汗が伝う。

「ふふ……冗談ですわ。シェータさん」

……と、いきなり優しい声に変わって、シェータは今度は驚きで固まった。

現れたのは、艶^{つや}やかな黒髪を艶^{あで}やかに垂らす女性？……のようだった。なかなか美麗で、地味な衣装を上手に着こなしている。そしてアトル以上の妖艶な微笑みを見せつけられ、シェータは呆然とする。傍には呆れ顔で苦笑するアトルが立っていた。

アトルが彼を示して言う。

「はは……紹介するよ、シェータ。これが僕の友人で、盗賊のメツスィー！ 性別は……男！」

「まあ嫌だ、男盗賊なんて……せめて淑^{しと}やかな女流詩人とでも言うってください」

確かに……良く聞いてみれば、ちょっと無理のある男性の裏声だ。それでもあくまで女だと主張したいのかメツスィーはしおしおと体を折り曲げてアトルに目配せする。またもアトルは苦笑いした。

——はい？ 盗賊さん？

皇子様の意外な友人に、シェータは啞然としたまま、立ち尽くしていた。

第3章 友と王城

「えええええ——！ 友達って、とうぞ……」

「シェータ！」

ようやく事態を理解し、思わず叫び声を上げてしまいそうになったシェータの口を、アトルが素早く抑える。幸い周りも騒がしかったおかげか、特に目立ちはしなかったようだ。

アトルは彼女に小さく耳打ちする。

「……こんな所で？盗賊？なんて言葉を大声で言ったら、何が起るか分からないよ」

「ご、ごめん……」

シェータは申し訳なさそうにしょげていたが、驚くのも無理はないだろう。彼女の中では、既に皇族の友達イコール貴族というのが出来上がっていたのだから。

それがまさか悪行を熟^{こな}盗賊とは、思いもしなかった。

「まあ、とりあえず私^{わたくし}の家でお茶でもしましょう」

未だに驚いているシェータに、メツスィーは満足そうに笑んだ。これが盗賊かと思うと……頭が痛くなった。

女神と皇子と盗賊という奇妙な組み合わせの三人は、都からいくらか離れた所にある森の中へとやって来た。メツスィーの家は、そこにあるという。

盗賊の住み処がある場所の割に、森の中は清々しくて、気持ちが良いかった。木立から小鳥がパイパイと囀^{さえず}るのが聞こえる。

風も爽やかで気持ちが良い。被っている布を剥いで、髪を風に触れさせたいくらいだ。

しばらく歩くと、木造の簡素な小屋が見えてきた。そこはまさに

「あばら屋？と言うのが相応しいくらい古びた小屋だった。メツスイーはその小屋の前までスタスタと近寄っていくと、「どうぞ」と言いながら扉を開ける。促されるままに、二人は中へと入っていく。
(うわ……………)

メツスイーの？家？とも言えない家は、ほとんど何もなかった…

……盗んできた宝の山以外は。

狭くて小さな小屋の中で、どっさりと積まれた首飾りやら金貨やらがきらきらと眩しい。メツスイーのような変わった盗賊のことだから、もつと小綺麗にしてあって、上品な女性の部屋のようになっているのではないかと思っていたが、彼女…いや彼もれっきとした盗賊だったらしい。

「はい。ここに座ってください」

金銀財宝の中から、メツスイーはいかにも貴族が使っていそうな上品な椅子とテーブルを引っ張り出し、まるで茶店のように綺麗に並べた。躊躇しながらも、二人は座った。メツスイーは満足そうにして次は可愛いカップを三つ取出し、その中に飲み物を注ぐ。そしてようやくメツスイーも席に着く。

「さて、アトルから聞いていたけれど……本当に変わった色の髪ですねえ」

体に塗った泥を白布で拭い、頭に被っていた布を取り払ったシェータを、メツスイーはまじまじと見る。シェータは自分の髪をいじって、少し不安げな顔をする。あんまり珍しがられるのに慣れていなかったからだ。

そのことに気づいたメツスイーが、掌をひらひらと振って笑った。

「あら、違いますわよ。あなたの髪の色が変わっていることではなくて、綺麗な白色だって言ってるのですわ。少し緑色も帯びていて……気にすることはないですわ」

人柄の良さそうな彼の笑顔に、シェータはほっと胸を撫で下ろした。

髪の色のこともあるのだが、実は「盗賊は悪い者」という意識が

まだ残っていて、正直心配だったのだ。相手が危ない人だったらどうしようかと。

だが、面白げに話す彼を見ると、そんな心配は不要だと安心出来た。そもそも、彼は普通の盗賊とは違う気がする。女装しているし。

気が楽になったところで、シェータはずっと気になっていたことを彼に訊いてみた。

「あの…どうやってアトルと友達になったんですか？」

彼は「嫌ですわ。敬語なんて使わないで」と苦笑してから、視線を上に向けて、思い出すように答えた。

「そうですね…この皇子様が、あまりにも皇子様っぽくなかったからかもしれませんね」

アトルの方を向いてふふつと笑うメツスイーに、シェータはごくごくと頷いた。二人の反応を見て、アトルが「そうでもないよ」と苦笑いする。

「私は金持ちだけを狙う盗賊なんですけど…なぜかその金持ちである皇子殿下に助けられてしまいました…」

「え？」

シェータは目を丸くしてアトルを見た。彼はお茶を飲んでいたところだったのだが、メツスイーの言葉を聞くとぶつと吹き出した。

（ア、アトルは一体何をして……）

「もうっ、アトルったら。相変わらず照れ屋なんですねえ。あの日だって…」

「あああああ、メツスイーそれは」

メツスイーがにやにやしながら言うつと、アトルは真っ赤になって立ち上がった。こんな彼は初めて見た。どうやら照れ屋と言うのは本当らしい。

メツスイーはさらに続ける。

「あ、でシェータさん。この皇子様とお友達になったきっかけだったかしら。あれはねえ…」

「わあ——！！　ちよつとメツスィーってば！」

彼は熟した林檎のような真っ赤な顔で、頭を抱えて叫んだ。そんなに聞かれたくないものだろうか。

そこまで恥ずかしがられると逆に聞きたくなる。だんだんわくわくしてきた。

「ぷぷつ……教えて！　メツスィー」

「シェータまで！」

意気投合して乗り気な二人に、アトルは心底困ったような顔をした。いつも物静かで穏やかな彼だったから、何だか可愛い。耳まで赤い。

「ええと、それは昨年のことだったんですけど……」

「……………」

メツスィーが語り始めてしまうと、アトルは諦めた様子でまた椅子に座った。恥ずかしいのか、唇を噛んでいた。

「私が神殿の篝火で温まっていた時のことだったかしら。その時突然兵士達に追いかけられたのですわ。別に盗みはついでのもりで来たのに……まったく一体何を誤解したのか……」

「……………神殿の不法侵入者は捕らえるのが決まりなんだよ、メツスィー。そもそもついでに盗みつて……」

アトルが口を挿むと、そんなものは知りませんわ、とメツスィーは言い訳をする。

「……で、面倒になった私は上手い具合に彼らを撒いて、空き部屋に逃げ込んだんですけど……そこで」

「そこで？」

いつの間にか握られていたシェータの拳に、ぎゅつと力が籠る。こも

「第2皇子のアトルに会ったのですわ。もちろん相手は皇族なのだから、当然捕まると思ったのですわ。なのに彼ったら……ふふ……」

言い掛けて、メツスィーは口を隠して笑う。

「えっ、何？」

シェータが目をきらきらさせて言う。メツスィーは今度は大笑いして背中を反らせた。

「ふっ…あははははっ！ いえ、その時アトルは匿^{かくま}ってくれたんですけど、その時に……う、ふふ…『女性を助けるのは男子たる者の役目ですから』とか、本気で言ってくれまして……あははっ！」

——女性？

「あははははは！ ？女性？って……アトルってばまんまと騙されちゃったのね」

「もうっ、そこまで笑うことないじゃないか……」

大笑いの二人に、アトルはもごもごと言う。よっぽど恥ずかしいのだろう、顔色は今にも沸騰しそうだ。

「まだまだあるのよ。アトルの面白話。えーっと……」

メツスィーが得意げに言っつて、その「アトルの面白話」を指折り数え始めると、ふとアトルは簡素な窓から外を見て、慌てて立ち上がる。

「あっ、いけないもう帰らないと。じゃ、じゃあね……」

「えっ？」

シェータも外を確認する。まだ昼過ぎだ。暗くなってもいないし、そんなに急がなくてもいいはずだ。

「…そんなに恥ずかしかったの？」

そう訊くと、図星だったらしく、顔を背けてそそくさと帰り支度を始める。元々荷物なんてほとんどなかったので、すぐに支度を終え、ぽかんと座る二人に言った。

「じゃあ……ご、ごめんね二人共。会議があるから……あ、メツスィー。シェータのこと…その、お願いね」

それだけ言っつと、彼はさっさと帰っていった。やっぱり帰り際の顔は赤かった。

後に残されたシェータがぽつりと呟く。

「……逃げたね」

「皇子様なのに、初心で可愛いのよ」

シェータは、くねくねと色気を振り撒くメツスィーを改めて見つめる。

彼の顔は、まさに女性そのもので、仕草も色っぽい。服装も女性らしい。まあ確かに、パツと見れば、アトルでなくても女性だと勘違いするだろう。声を聞くとなんとなく分かると思うのだが。

「さて……………」

お茶を飲み終えたメツスィーは、急に席を立ち、盗品の山の中をこそごとと探り始めた。何かとシェータがその様子を見ていると、彼は動きやすそうな男物の服と短剣を取り出した。

「……………何してるの？」

シェータがきょとんとして訊くと、彼は何か企んでいそうなになにやした顔で振り向いた。思わずぞくつとする。

「ふふふ……………王城に忍び込むのですわ」

メツスィーが楽しげに微笑むと、シェータはぎょつとした。

（ま、まさか金品を盗みに……………！？）

「まあ、アトルの仕事ぶりを見に行くだけなのですから」

本当はカモ探しだけだね、ということはあえて言わず、メツスィーは少女にウインクした。

彼女はほつとしたようで息を緩めたが、すぐに目をきらきらさせてメツスィーに掴みかかった。

「ねえメツスィー！ あたしも行きたい、王城！ 良いでしょ？」

「はあ……………！？」

意気揚々としていた盗賊は、目を見開いて、有り得ない！ といった表情で飛び退いた。シェータが膨れっ面になって言う。

「いいじゃない行っても。駄目って言っても付いて行くからね！」
頑として聞かないシェータに、メツスィーは頭を抱えて一つため息をつく。

そして、今までに見たことのない真剣な顔でシェータに言い聞かせる。

「あのねシェータさん。王城っていうのは警備の厳しい所で……

一般人が簡単に行けるような所ではないのですよ。それに私の足手あしで纏まといになるようでは困るのですよ」

「いーやー！ 絶対足手纏いにならないから！ だから連れてつて！」

それでもなお自分の意志を曲げない少女に、メツスィーは大きなため息をついてから、諦めたように言った。

「全く……分かりましたわ。とりあえず、そこにある動きやすい服装に着替えてください。あ、それと……」

メツスィーは少年の服を渡した後、黒い染料を取り出した。

「それ……どうするの？」

なんとなく嫌な予感がしたシェータは、冷や汗を浮かべつつメツスィーに問う。答えは案の定だった。

「あなたの髪を染めさせていただきますわ。でないと見つかった時の良い訳が面倒ですから」

そう言うなりメツスィーはさっさとシェータの髪を束ねようとしたが、彼女は自分の髪を抱えて後退する。

「どうしても？ 染めなきゃ駄目？」

「駄目、ですわ」

染めないと王城に連れて行ってもらえないと悟ったシェータは、渋々彼に髪を預けた。

時は、大分暗くなった夕方頃。

西日が赤く輝く、黄昏の時間だ。シェータは夜中の方が忍び込みやすいのではと思ったが、メツスィーが言うにはこの時間が見張りの交代時刻で、侵入には一番の時間帯らしい。

静かで閑静な王城に、黒髪の男女は忍び込む。

そして、アトルが居るらしい二階部分へと向かう。

男の方がぶつくさと言った。

「はあ、何でこんな女の子と一緒に潜入しなくちゃならんのだか……一人ならあれもこれもし放題なのに……」

そう言うのは盗賊装束に身をやつしたメツスィーだ。昼間の彼からは予想できないほどの俊敏な動き、鋭い眼差しで、音も立てずさかさと走る。口調も盗賊らしいものに変わっている。

「やっぱり悪いことしようとしたのね……」

メツスィーの隣を走る金眼の少女が言った。彼女はシェータだ。元は白緑だった髪を黒く染め、肌にも泥を塗っている。服も少年のものにして、いかにもアステカ人の少年のように見せている。

「別に良いだろ、盗賊なんだから……」と、ここだな」

文句を言っていたメツスィーは、城のテラスに繋がる扉の前まで来ると、慎重にほんの少しだけその扉を開けた。

（よし……誰も居ないな）

用心深く辺りを確認してから、メツスィーとシェータはテラスへ出る。広い王城を駆け回っている内に、外には紺碧がかかりかかっていた。

だが、二人の視線はその一つ向こうにある小さなテラスに向けられていた。そのせいで、気付かなかった。空の異変に。

メツスィーは目先のテラスを指差して言う。

「ほら、シェータあそこだ。あそこからアトルの居る部屋に繋がってる」

「本当!？」

シェータは目を輝かせて、思い切り飛び跳ね、足音を立てずアトルのテラスに降り立つ。

「へー見事だねえ……」

（さて、じゃシェータはここに置いて金目の物でも盗みに……ん？）

ふっと北の空が視界に入った時、メツスィーが気付いた。

シェータはアトルの部屋の窓を覗き込む。高級で整った部屋の中、彼は一人で書物を読んでいた。

シェータは彼を呼ぼうとした。

「アト……………」

その時だ。

「うわあああああ！！」

城下からだろうが、突如悲鳴が響いた。

慌ててシェータもしゃがんで身を隠した。

あまりの出来事に、窓からアトルが顔を出す。

「何だ……………ってシェータ！？ どうしてここに……………」

シェータの存在に彼は驚いたようだったが、あるものを見つける
とその顔は一気に蒼白になり、一瞬固まった。その目は北の空を見
つめている。

「…嘘だろ……………何だよ、あれ……………」

同じように空を眺めるメツスィーも、震えた声を漏らした。シェ
ータも彼らに倣^{なら}って空に目を向ける。

……………そこには尾を引く巨大な光があった。

「彗星……………?」

彗星が現れた。その意味を知らなかったシェータは、ただただそ
う呟いた。これが波乱の幕開けになるとは知らずに――。

第3章 友と王城（後書き）

次回は、遂に「第2部 波乱」（予定）へと進みます。ここからへんから神様も登場していきますので、お楽しみに。

第4章 神への生贄

北の空に彗星が…………。

どうしたというのだ。まさかテスカトリポカ様がお怒りに…………。

何？ ウイツィロポチトリ様が守ってくださっているはずではないのか…………。

きっとお力が弱っておられるのだ。

恐ろしきことや…………。

ウィツィロポチトリ様には何としても闇を抜って貰わねば…………。

…。

この国はどうなってしまふのか…………。

悲鳴を聞きつけ、城下にはわらわらと人々が集まり出した。皆それぞれに北の空を見上げ、あれこれと口論している。中には狂乱して暴れる者達まで居る。次々と明かりが灯され、闇の夜は昼間の如き騒がしさに包まれた。

「………… あつ、シェータ！」

アトルは我に戻ると、シェータのか細い二の腕を掴んだ。その手は小刻みに震えていた。

「早くここから逃げてくれ！　じきにここは人だらけになる。誰かに見つかる前に早く…………　これを持って逃げてくれ」

そう言つて、アトルは古びた小豆色あずきいろの布で巻かれた小包みを渡し、立ち退くように促した。

「えっ…………　これって…………」

「いいから早く！」

「…………　分かったわ」

動揺するシェータを言い聞かせ、アトルは彼女の背中を押す。

（彗星って…………　何が危ないのか、良く分からないけれど）

「ほらっ、メツスィー！」

シェータは軽々とテラスを飛び越えると、相変わらず北の空を見つめるばかりメツスィーの服の端を引っ張って、半ば強引に王城から去ろうとする。意気消沈していた盗賊も「あ、ああ……」と虚ろな返事をして、先へと急ぐ。

走り去る背に「アトル様、彗星が……！」と言う女官の慌てふためいた声が聞こえる。余程のことなのだ、この彗星は。

王城の部屋にも早々と明かりが点いていき、アトルの言うように早く逃げなければ見つかるころだった。通り過ぎていく人影は皆バタバタと忙しそうにっていて、二人に気付くことはないかもしれないが。

(…アトル……)

別れ際の彼の顔を思い出して、シェータは後ろを振り返る。

彼は不思議な顔をしていた。焦っているのか、怒っているのか、悲しんでいるのか……。それはどうしてなのか、何が起こっているのか気になって仕方なかった。彼女も同じような悲痛な顔をする。

「……おい、シェータ！」

走りながら、彼女の様子に気づいたメツスィーが叱責する。即座にシェータは顔色を直す。

「今やることを考える！」

「……………ん」

シェータはたったそれだけ答えた。考えることが沢山あったけれど、メツスィーが言う通りだ。

(また会えるんだよね、アトル……………)

心の中でもう一度背中を振り向き、そして走り出す。

——大丈夫、大丈夫。

前向きに、前向きに——。

——前向きに、前向きに……。

アトルと別れてから、三日が経った。あれから連絡はない。

帝国は彗星事件で騒然としていた。メツスィーについて市場まで行っても、ひとけ人氣がないし、街全体に活気がなくて、妙にざわざわとしていた。以前は商品の値切り交渉の煩いうるさ声こゑが聞こえたり、昼間から酒に酔った若者たちの喧しい怒鳴り声やかまが聞こえたりしていた。それが……こんな葬式みたいに静かになってしまふなんて……。

シェータはこの頃、メツスィーの家に住みついていた。本当はそろそろ天界に帰る頃なのだが、実際帰っても仕事がある訳ではないので、無断で滞在期間の延ばしていたのだ。

そして、昼の間メツスィーが出かけている時に、彼女は国の情報集めをしていた。メツスィーが言うには、今は情報をいち早く集めることが重要なのだそうだ。その理由は教えてくれなかったが……。

夕方——。紅い夕陽が木々に光を投げかけ、やがて空の紺碧が現れ始める頃。

シェータは、窓際に寄りかかって、長い溜息をついていた。

彼女は、今日もテノチティトランに情報を集めに行った。でも人数が少ない上、彗星事件に関する真面な情報まことは得られなかった。やっぱり王城に忍び込んで情報を得てくるメツスィーを待つしかない。今日の活動が終わり、外を眺めながらぼーっとしていると、黒衣に身を包んだメツスィーが帰ってきた。シェータははっとして立ち上がり、すぐに駆け寄る。

急いで扉を開けると、その前に彼が力の抜けた目で立ち竦んでいた。その表情は険しく、沈んでいる。

何かあったのかと聞こうと思ったシェータだが、嫌な予感が胸を過って、一瞬躊躇ためらった。

「あ……お帰りメツスィー。その………」

シェータはさり気なく訊こうとしたが、どうしてもぎこちなくな

ってしまつて、声に出すことが出来なくなつた。

そうやつてもじもじしていると、見かねたメツスィーの方から、話を切り出した。

「シェータ……まず、落ち着いて聞いて欲しい。出来るな？」

「……うん」

心を決めて、シェータはしっかりと頷く。

メツスィーは眉間に皺を寄せ、苦しげな表情で彼女にそのことを告げた。

「アトルが……生贄にされることになつた」

——！！

冷たい血液が、脳天から、一瞬にして体を巡つた。

頭が真つ白になつた。何もかも空っぽになつて、ただ目を開いたまま動けなかつた。

——嫌だ。認めたくない。……でも、

これは事実だ。

ドタツ、という音を立てて、シェータはその場に力なく崩れ落ちた。そして顔を手で覆い、唸り声を立てる。泣くことを、叫ぶことを必死で堪えて、うんうん言いながら肩を震わせて堪える。

「……………」

メツスィーはそれを悲しげな瞳で見つめた。

「……………大丈夫。続きを……話して」

俯いたまま、彼女はよろよろと立ち上がる。そして、メツスィーの方を見上げる。

肩が、拳が、足が……全身が、震えていた。視界もぼやける。瞼まぶた

が重い、熱い。でも、立ち止まっていけない。

——今の状況を知つて。考えて、考えて……………。

メツスィーは続けた。

「この間の彗星……………あれはウィツイロポチトリが弱っているからだということになつたらしい。それで、神に捧げる高貴な生贄が必要になつたそうだ。それで、第2皇子であるアトルが……………」

「……………」

シェータは泣かずに、じつと黙って彼の話を聞いていた。震える体を抱きしめて、一所懸命抑えながら。薄桃の唇が、真っ赤になるまで噛みながら。

メツスィーは、そんな彼女を見ていられないと言うように、彼女から目を逸らした。黒髪が額に垂れ、表情に黒い影を落とす。

彼だつて辛いのだ。こんなことを彼女に伝えることが。でも、言わなくてはいけなくて……それが本当に苦しくて……。

——だからと言って、何もしない訳にはいかない。

「……シェータ」

彼は再び顔をシェータの方に向け、乱暴な仕草で己の黒髪を払うと、意志を持ったしつかりとした口調で言った。

「生贄にされるものは、期日までは神のように扱われるそうだ。

だからアトルはきつとぴんぴんしてる。……その内に、俺らであいつを取り戻そう」

シェータは驚きで目を見開いた。

——そんなことが出来るの？

彼女はそう思ったが、口には出さなかった。問題は出来るかどうかじゃない。するかしないか、そう思ったからだ。

「……分かったわ。絶対に、アトルを殺させたりはしない」

握り拳を一層強く握って、強くそう誓ったが、不意に瞳からぼろりと涙が零れた。

「あ……………」

涙を拭おうと手で押さえたのだが、次から次へと止まることなく雫が零れていった。ぼろぼろ零れる涙を、シェータは必死で止めようとするのだが、もう自由が利かなかった。

だんだん顔が歪んでくる少女を、メツスィーは黙って抱き締めた。そして落ち着いた、優しい声で言った。

「……辛いのを抑えるな、シェータ。あいつを助けに行くのに、涙を持っていく必要はない。………今は、堪えなくてもいいんだ……」

……」

シェータは、がっしりとしたメツスィーの胸にしがみついた。

「うう……ひっ……ひっ……」

まるで子供のように、シェータは痙攣けいれんしながら泣きじゃくった。

我慢することなく、全てを吐き出して、声にならない叫びを上げた。

——アトル、会いたいよ。寂しいよ。

居なくなっちゃうのなんて嫌だよ。

置いて行かないでよ。

——大丈夫。僕は君の傍にいるよ。

そう言ってもらいたい相手は、今ここには居ないのだ。

——だから、あたしが助けるんだ。

「ああ——！！！」

情けないけれど、耳鳴りのするほどの叫びを上げて、全てを解放して泣いた。

そして、決心した。

絶対に、何があっても、彼を助けると。

第4章 神への生贄（後書き）

今回、忙しさのあまり手抜き気味です……………。
あああああ……………ごめんなさい……………。

第5章 血塗れの神事（前書き）

今回だいぶ残酷な描写があります。「そんなの全然ヘーキだよー！」という方はお進みください。私の未熟さでいくらか効果は薄いとは思いますが、「かなり苦手……」という方は、ご注意ください……。なんせアステカの生贄の儀式ですから……。 （汗）。

第5章 血塗れの神事

静かで、落ち着いた空気の漂う部屋。

父上が、たとえ低い身分にあつても不自由をさせないように、と整えてくれた部屋。

今日で、この部屋を離れる――。

自室で、アトルはぼんやりと部屋を見回していた。

綺麗に並べられた寝台、机、棚……。もう見慣れた配置が、なぜだかとても懐かしく感じた。

彼は、そつと目を閉じて微笑んだ。

――この部屋で、もう何年間夢を見ていたのかな…………。

笑んだまま目を開き、過去を思い出すように、部屋に置いてある家具の一つ一つに触れてみる。

――……父上…………。

ふと、これまで愛用していた木製の椅子が目についた。赤茶の木でこしらえた、上品だが質素なものだ。触つてみると、乾いた触覚がさりと気持ち良かった。

これは、五つの誕生日に父から送られたものだった。もう大分使っているはずだが、まだまだ丈夫で、綺麗なままだ。

次に、窓際の壁が目に入った。

冷えていて冷たい壁だった。けれども少しだけ温かく感じた。この壁には、懐かしい今までが染み込んでいる。

「アトル様。ご用はお済ですか？」

ぴくりと、部屋を懐かしむ手が止まる。

背後から、まるで人形が話しているかのような、表情のない声が聞こえた。振り向くと、癖のある髪をした長身の青年と、五・六人の侍女たちが頭を垂れている。

アトルはふつと壁から離れ、その部屋の空気を堪能するように、

ゆつくり歩いて行つた。

「ミクトランか……ああ、全て終わったぞ」

彼は、さつと無表情になつてミクトランに応えた。

口調は少し硬かつた。皇子として、そして神への生贄いけにえとしての態度だつた。彼は農民のように気安く心を許したり、話しかけてはいけない立場にあつたのだ。しっかりした態度を取り、民の代表としての自覚を持つて生きよ、と周りからもしばしば言われていた。そのくせいやらしい愛人の子、皇子として相応ふさわしくない、と言われることもあつた。

正直言つて、どうして良いのか分からなかつた。そんな風に自分の生き方にとやかく言われて、居場所が感じられなくなることもあつた。

——あの頃も、今となつては懐かしい……。

「アトル様。ご用がお済になられたのなら、急ぎ神殿に移動していただきたく思います」

ミクトランの刺々しい言葉が、彼の物思いに区切りをつける。

「分かつた……」

アトルは少し淋しそうに眉間に皺しわを寄せて、目を伏せ、部屋を後にした。堅苦しい空気の流れる廊下は、寒くて居心地が悪い。

居たたまれなくなつたアトルは、颯爽さつそうとその四角い廊下を抜けていく。その後をミクトランと侍女たちが早足で追う。

足を綻はなばせる侍女たちを目の端で見て、さすがに早すぎると感じたのか、青年はアトルに呼びかける。

「アトル様。もう少しゆつくりと……」

「ああ、分かつたよ」

振り払うように、そつけなくアトルは答えた。

そして仕方なく、彼は寒気のする道を遅い足取りで歩いて行つた。

「……行くぞ」

ボロ小屋の扉を開け、盗賊姿のメツスイーが呼ぶ。その声に、少年に扮したシェータが張りつめた声で応える。

「……うん」

今日は、帝国にとって大切な日だった。

……生贄が捧げられる日。そして皇子が神殿へと移動させられる日なのだ。

彗星事件から鎮まっていた首都も、この日ばかりはざわざわと落ち着きがなかった。皆、ピラミッド型の神殿へと列をなして行く。それぞれの思いを抱えながら。

シェータとメツスイーの二人も、民衆に紛れて神殿へと入っていく。人が多すぎて、途中で何度も逸れそうになりながら――。

テノチティトランに高くそびえる、ウィツイロポチトリ、トラロツクの二神を祀る神殿。

それはテノチティトラン建都の頃から、既に存在していたという人々の信仰の中心。その壁は白く磨かれた石で出来ており、陽の光を反射してきらりと光る。近くでは良く分からないのだが、綺麗な三角形をしていて、建てるのに気の長くなるような時間をかけたのだろうと感心する。

多くの民と共に、神殿の柱を潜り、中へと進んでいく。そして生贄台の見える場所まで来ると、そこに足を留まらせる。唾を飲み込み、ただ生贄の台を見つめる。

シェータは、ちらりと周りの人々の顔を盗み見る。皆心配そうな、不安そうな顔をしている。きっと生贄は誰でも嫌なのだろうと、生贄にされる者たちが心配なのだろうと、彼女は思っていた。

——きつと皆だって嫌だよ。生贄なんて……。

シェータは一度目を伏せ、全身に力を込め、意志を固めぎろりと

生贄台を睨んだ。

メツスィーもまた、彼女と同じように周りを回し見る。

やはり人々の顔に浮かぶのは、不安の色。

それは生贄への心配ではないだろうと、メツスィーは思う。

彼らが本当に心配なのは、この儀式でウィツイロポチトリが力を増すことが出来るからだ。

ウィツイロポチトリとテスカトリポカ。対立する二人の神。その力はほぼ互角。どちらかが少しでも弱まれば決着はついてしまう。

……彼らが恐れているのはそれだ。生贄のことよりも、自分の未来を心配している……。

——……なんて。アトルに会う前は俺もそうだったじゃないか。

あいつが皇子で、今は生贄なんて立場にあるから、こんなことを思うのかな……。

メツスィーは、ふと隣にいるシエータに視線を移す。

彼女は生贄台から目を逸らさずにいた。ずっと、ただじっと睨みつけている。体全体に力が入って、ぶるぶると震え、強張っている。それでも、視線だけは揺るがない。

メツスィーは、そつと少女の手を握ってやった。

「シエータ……これから行われるのはかなり残酷なものだぞ。見るのは止めておけ。倒れるからな」

シエータは、視線をまつすぐなまま応えた。

「倒れなんて、しないよ。この一部始終を……目に焼き付けるんだから！」

握った手に、ぎゅつと力が込められた。自分よりはるかに小さく細い手なのに、締め付けるようにその力は強かった。震えを抑えるように、爪が食い込むまで握り締めている。

「それほど言うなら、止めはしないさ。ただ」

メツスィーは生贄台から目を離さないでいるシエータの顔を覗き込んで言った。

「言うからには、きちんと焼き付けているよ」

強くて、怖い口調だった。

彼にも、それなりの覚悟があるのだろう。

——生贄の儀式を何度見ているのか知らないけれど、
こついうものは、きつと何度見ても慣れられるものではないはず。

ざわりと、人混みがどよめいた。

生贄台の傍に、複数の神官、そして二人の青年が現れた。彼らは腰布一つで、他には何も纏まとっていない。おそらく、彼らが最初の生贄だろう。

石造りの神殿内に、厳格な神官長の声が響く。

「これより、我らが神ウイツイロポチトリへの贄にえの儀式を行う」
その声を合図に、二人の青年は速やかに台へと連れて行かれる。

シェータは、その二人の顔を良く良く見る。少し遠いのだが、彼らの顔色は青ざめているようだ。

まず一人が台の上へ仰向けに寝かされる。その周りに清めの葉付きの枝やら水瓶やらを持った神官たちが囲い、その中の一人は黒曜石のナイフを持っていた。

「我らが神ウイツイロポチトリに告げる。ここにあるは貴方への供物である。これより、生ける者の力を貴方へ捧げたい！」

儀式をひたすら睨めつけるシェータは、大きく身震いする。ぞくり、と背筋が凍った。

青年は、枝を持つ神官たちに体をその葉で撫でられた後、次は水瓶の水を全体にかけられた。それらの清めの儀式らしいものが終了すると、一人の神官が、ナイフを彼の胸元へ持つていく。そして真顔で、それを褐色の肌に突き、ざくりと刃を入れる。青年はうつ、と呻いたが、無抵抗のまま身を預けている。

（これが……神への捧げもの？）

シェータはぶるりと震える体を、片腕で強く抱き締めた。
目の前で行われる儀式……。

黒光りするナイフが、青年の体へと埋まっていくな。青年はのた打ち回るのを我慢するように、体をまっすぐに無理矢理伸ばし、不自然に固まっている。

嫌な音をさせて、ナイフは吸い込まれるように体の中へと入っていく。真っ赤な鮮血がどろりと溢れ出る。神官たちの白い衣に、赤い汁が飛び散る。

青年は苦しみに塗れた呻きを零す。

（何………何、これ………？）

少女の力のこもった腕が、潰すように体を抱きしめる。

体の奥底、胸の鼓動がいやに鮮明に聞こえる。どくん、どくんと次第に感覚が狭まり、胸が苦しくなると、吐き気がした。思わずメツスィーと繋いでいた手を放し、口を押える。

メツスィーはそれを見て、彼女の視線を儀式から無理矢理引き剥がす。

「言わんこつちやない………！ これ以上みるな！ 吐くぞっ！」

シェータは振り払うように頭を左右に振る。

「だ…大丈夫………見て、る…から………」

「これ以上は駄目だ！」

メツスィーはなおも叱責しっせきしたが、彼女の決意は崩せない。

——一応、儀式の内容は一通り聞かされていたのだが………。

『……生贄の儀式では、人間の心臓、そして血が捧げられるんだ。お前にはかなり酷だぞ。大丈夫か？』

『大丈夫。そのくらいなら全然堪えられるよ』——。

——何が、全然、よ………。

シェータはメツスィーとのやり取りを思い出す。

実際、彼女は死というものを見たことは何回かあったが、生贄という形で見るのは初めてだった。けれど死を見るのは経験していたから……生贄、というものを甘く見てしまったようだ。

——まさか、目の前で見るのが、目に焼き付けることが、こんなに苦しいなんて……。

でも。

「……大丈夫。まだ、いけるよ……」

顔に苦渋を浮かべるメツスイーを押し黙らせ、彼女は視線をまた生贄台に戻す。儀式は山場に差ししかかっていた。

血塗れの神官が、ナイフで開けられた青年の胸の穴の中に手を入れる。手は何かを探すように、もぞもぞと動いているのが分かった。何かを見つけたのか、おもむろに手を止める。

すると、青年がぐうつと呻いた。

神官の腕が、メリメリという嫌な音をさせて、持ち上げられる。

青年が血を吐き出す。

（あれは……）

シェータは、固唾をぐくんと呑み込んだ。

民衆の、呼吸の音、僅かに震える音さえもが、聞こえなくなる。

耳の中に、鉄の蓋が閉められる。

——っ！

赤を滴らせ纏いながら、青年の胸から、紅い塊が現れる。同時に赤々とした液体が溢れ出し、たちまち周囲を真っ赤に染め上げる。まるで……戦場の炎のように。怪しく輝く、紅い月のように。

「……………うっ……」

蚊の鳴くような小さな小さな呻きを上げ、青年は死んだ。心の臓を抜き取られて。

（こんな……こんなことが、行われて、いるなんて……）

シェータは大きく咳き込み、足の力を失って倒れかかる。メツスイーが彼女を支えるように手を差し伸べたが、彼女はそれを払った。咳を無理に抑え込み、浮かびかけた涙を拭い、座り込んだままでも凜とした目つきでひたすら見つめる。そう、彼女が言っていたように、情景を目に焼き付けるために。

神官は、心臓を抜き取った後、死体に一礼して、くると踵かかとを返

す。彼はすたすたと歩いて行く。今更気付いたのだが、彼らの背後に、神の姿を象った石の台があるのが見えた。

神官は、心臓を掲げ、神へと言葉を渡す。

「我らが神よ！ これなるは生きとし生けるものの心の臓。これを持ちて、貴方のお力の一部となることを願わん！」

おおおおおおおっ！！！！

（なっ、何！？）

彼の言葉と共に、一気に民衆が騒ぎ出す。

ウィツイロポチトリ神よ！ 我らにお慈悲を！

この国にご加護をどうか……………！

彼らは口々に祈りの言葉を捧げていた。ただ……それは決して静かなものではなく、ほとんど暴挙のようにしか思えなかった。

神官は、血みどろの手にある心臓を、台に安置する。青年の生き血が吸い取られるように、冷たい石に染み込んでいく。

（同じ、人間の死を……………彼らは、もののようにしか思っていないの！？）

シェータは、背中を通っていく寒気を感じた。寒い、寒い。人の心の冷たさが。

猛る人々に囲まれ、儀式は進行していく。次は、二人目の青年の番。そして、その次は……………。

（アトル……………）

唇を噛んで、目元が赤く腫れているシェータに、メツスィーが囁く。

「しっかりしろ」

そして。

「良いか、シェータ。アトルはまだ神殿の中から出て来てない。あいつが現れたら俺が近場で火事を起こす。その隙にお前はアトルを連れて逃げろ！」

それと、こうも言った。

「こんな多くの観衆の前だから、見つからずに攫うのは無理だ。

だから、誰にも捕まることなく堂々と目の前を渡って行け！」

「うん！ 分かったわ！」

——弱気なままでは……いられない！

二人目の生贄も、同じように台に上げられ、心臓を抜き取られていく。でも彼はやっぱり抵抗しない。生贄だから当たり前なのだろうが、見ていて気持ちの良いものではない。やっぱり何度見ても慣れられる訳がない、とシェータは改めて思う。

神官が二度目の祈りを捧げ、舞台がどす黒い赤色に染め上げる頃、民衆の勢いは最高潮に達し、神官長は高らかに神、そして民衆に告げる。

「……そして、我らが神よ！ これより貴方に捧げるは、大いなる力を持ちし高貴なる生贄。帝国第二皇子、アトル・イルウィカミナである！」

おおおおおおおお！！！！

……さて、皇子だと。そんなことがあり得るのか？

神の子である皇帝の子なのだから、神へと返すのではないか？

いや、それにしても……。

歓声は耳障りなほどだったが、その中にいくつかのどよめきもあった。それをシェータは聞き逃さなかった。

（やっぱり、何人かは皇子の生贄に動揺してる。これを利用すれば……）

そんなことを考えていると、再びわあつと歓声が上がった。神殿内から現れたのは、アトルだ。

「……良しっ」

それを合図に、メツスイーは急ぎ神殿から離れていく。この周辺にあるぼろ屋に、火を放つために。

「……………」

美しい布を被り、彩^{いろ}とりどりのオパールなどの宝石で飾られた彼は、無言で血の神殿を歩いていった。陽光を受けて額飾りや胸飾りがきらきら煌めき、先程殺された青年たちとは雲泥の差だ。やはり

同じ生贄でも、皇子となると扱いが違っらしい。

「……………」

シェータはどきつとした。

タイミングを見計らうためにずっとアトルを凝視していたのだが、なぜか彼と目があつた。こんな沢山の民の中で。

しかも口が少しだけ動いていたのが僅かに見えた。さすがに何を言いたいのかは分からなかったが、彼が何かを伝えようとしているのは感じられた。

(…何? ……あたしに何が言いたいの、アトル……………)

そして、さらに驚いたのはその次のことだ。

「お待ち頂きたい!」

神殿の中央まで辿り着いたアトルが、まだ少し高めの声で叫んだ。彼の声が神殿中にこだまする。

(アトル!?)

しんと、場が静まり返る。大声で祈りを上げていた民衆も、さすがに音量を抑え、静かに彼の声を聞き届けようとしている。全ての民が、姿勢を正し、目前に立つ皇子を見つめる。

皇子は、凜とした威厳ある態度で言い放った。

「私に、一月の期間を与えてもらいたい!」

神殿は、重い鉄の布を被ったような空気に包まれ、民衆、神官たち、氷の息吹が通った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0521y/>

緑風のシェータ

2011年11月27日23時08分発行